

日本語フレームネットにおける「伝達」領域での分析

藤井聖子（東京大学）

小原他（2005, 本論文集）にあるとおり、日本語フレームネット（以下、JFN）では、まず「移動」と「伝達」の意味領域に焦点をあてて分析・記述を行っている。本稿では、「伝達」領域での分析を概観する。最初に1節で「伝達」領域での分析指針の概要を述べる。2節で、基本的伝達動詞群の分析例（概要）を示す。

1. 「伝達」領域に参加するフレームと語彙

英語に関するフレームネット（以下、FN）では、Communication（伝達）フレームがこの意味領域の親フレーム（parent frame）として設定され、その親フレームCommunicationからの受け継ぎフレームとして、Statement（言明）フレームやCommunication_manner（伝達_様態）フレームをはじめ、(1)に例示するフレームが含まれている（他にも多くのフレームが設定されている）：

(1) 「伝達」領域におけるフレーム・参加する語彙の例 (1)¹

◆ COMMUNICATION	communicate v
■ STATEMENT	say v, speak v, talk, add, address v, etc.
■ COMMUNICATION_MANNER	babble v, chatter v, gabble, mumble v, etc.
■ COMMUNICATION_NOISE	babble n, groan v, whisper v, whine v, etc.
■ COMMUNICATION_RESPONSE	answer n/v, counter v, reply n/v, add, etc.
■ CONTACTING	call in v, call n/v, contact n/v, e-mail v, mail v, etc.
■ SPEAK_ON_TOPIC	address n/v, discuss v, lecture n/v, etc.
■ REQUEST	appeal n, ask v, beg v, demand n/v, etc.

さらに、Judgement（判断）フレームを親フレームとして設定し、その親フレームJudgementからの受け継ぎフレームとして、(2)に挙げるようなフレームが設定されている：

(2) 「伝達」領域におけるフレーム・参加する語彙の例 (2)

◆ JUDGEMENT	admire v, blame n/v, criticize, fault n/v, etc.
■ JUDGEMENT_COMMUNICATION	accuse v, criticism n, criticize v, etc.
■ JUDGEMENT_DIRECT_ADDRESS	compliment n/v, scold, thank v, thanks n

このような英語のFNでの分析との対応を考慮しつつ、同時に日本語における伝達領域での語彙使用の実態を重視し、(A)(B)(C)3つの動詞群をこれまで分析してきている：

- (A) 伝達領域内で複数のフレームに関与し汎用性の高い語彙： 基本的伝達動詞
言う、話す、語る、伝える、述べる、しゃべる、etc.
- (B) 機能用法的に特化した語彙： 評価を伴う伝達動詞
ほめる、しかる、おこる、ぼやく、etc.
- (C) 伝達領域以外の意味領域にまたがる語彙： 「移動」領域とまたがる伝達動詞
もらす、もれる、こぼす、こぼれる、伝える、伝わる、etc.

(A) は、多義性・汎用性を示す基本的伝達動詞であり、Statement(言明)フレームを想起する用法が典型的であるが、伝達領域内での他のフレームを想起する用法も考慮して記述する必要がある。FNの枠組みでは、多義性をもつ語彙に関しては、まずそれぞれの意義を識別し、それぞれの意義の形式との対応を語彙項目(lexical unit = LU)とみなし、LU単位でフレームやフレーム要素の分析を行う。一方、(B)に挙げたように、機能用法的に特化した語彙も多くみられる。その一例として、評価を伴う伝達動詞(行為・行為者・行為の結果や事態に対する話し手の心的評価を言語化する際に用いられる語彙)を分析している。さらに、(C)に挙げたように、伝達領域内だけでなく、伝達領域以外の意味領域にまたがる語彙も多々ある。そこで、もう一方の重点的分析領域としている「移動」領域のフレームとまたがる語彙群を分析している。このような指針での分析を通して、個々の語彙の意味用法を綿密に明示する具体的な第一義的目的・成果物とともに、語彙体系を記述し構築する際により一般的な問題に対しても、グローバルFN²に対して日本語の立場から提言できることを目指している。

以下、(A)について述べる。(B)については、鈴木(2005, 本論文集)参照。(C)については稿を改めて報告する。)

2. 基本的伝達動詞の記述例とその課題

「伝達」領域の基本的伝達動詞群の分析においても、小原他(2005, 本論文集)で「移動」領域において例示した同様の方法・手続きで分析を進めている。伝達動詞群の分析においても、FNでのフレーム及びフレーム要素を背景・出発点としつつ、日本語語彙の記述に必要なフレーム要素の再考(必要に応じた細分化)を行ない、さらに、類型論的特色を考慮し分析している。

Statement(言明)フレームでの、「言う」「話す」「語る」「伝える」「述べる」「しゃべる」の用法に参与する典型的なフレーム要素としては、Speaker(話し手)、Addressee(聞き手)、Message(伝達された発話/言葉)、Topic(話題)、Medium(手段)、Manner(様態)などがある。これらのフレーム要素を含むアノテーションの例を、(3)に示す：

(3)

- a. [Speaker 村山富市首相は] 年頭にあたり首相官邸で内閣記者会と二十八日会見し、[Topic 社会党の新民主連合所属議員の離党問題について] [Message 「政権に影響を及ぼすことにはならない。離党者がいても、その範囲にとどまると思う」と] <target>述べ</target>、大量離党には至らないとの見通しを示した。
- b. 右上手を取る「左四つ」を意識、全盛時の突き押しはまだ見られないが [Speaker DNI] [Message 「ひざの痛みを意識しなくなった分、引きつけて前に出られる今は当たりを磨いて大きい相撲を取りたい」と] [Manner 笑顔で] <target>語る</target>。
- c. [Speaker 敬子ちゃんは] 転入後四、五日間は [Message 地震体験を] <target>話し</target> たがらなかった。
- d. 昼間の静也に接する時は『このヤロー』なんて乱暴な言葉を使い、妙に接する時は、未来の母ということで、[Speaker DNI] [Message すごくいいいな言葉を] <target>しゃべる</target> んです。
- e. 乗客の中には [Message 文句を] <target>言う</target> [Speaker 人] もいたが、<後略>

これらの用例に対しアノテーションを行い、それぞれのフレーム要素とその表現形式を明記する。例えば、(3a)において、Topic（話題）が「について」で標識されていることや、Speakerが「は」で標識されていること；Message（伝達された発話／言葉）に関しては、(3a) (3b)においては「と」引用助詞で標識される補文である一方、(3c) (3d)においては「を」格助詞で標識される目的格の名詞句であること（Messageフレーム要素に関しては後述の問題も参照）等である。(3b) (3d)のSpeaker（話し手）の形式がDNIと表示されているのは、限定指示的ゼロ表示（Definite Null Instantiation）であることを示している。このように、ゼロ表示の場合も、フレーム要素である場合は、DNIという形式表示とともにアノテーションを行なう。

このようなタグ付けされた用例を蓄積することにより、動詞ごとにそれぞれのフレーム要素の組み合わせを結合価パターンとして蓄積していく。例えば、(3a)において「述べる」がSpeaker + Topic + Messageという結合価パターンで具現化されていること、(3b)においては「語る」がSpeaker + Message + Mannerという結合価パターンで具現化されていることを示す。それに加え、それぞれの結合価パターンに関して、その形式（上で例示）による結合価パターンの下位分類も列挙し、結合価パターン表を作成する。この結合価パターン表は、フレーム要素とその表現形態との両方の情報を含む。無論、あるフレームに可能なすべてのフレーム要素が共起するわけではなく、共起するフレーム要素の組み合わせとその形式が、このような結合価パターン表の構築によって、明確になる。

以上、基本的伝達動詞構文での意味分析記述の基本的枠組みを示した。以下、日本語の精緻な語彙意味記述のために取り組んでいる課題について述べる。

まず、課題の一つとして、上記フレーム要素概説において英語のFEに基づいてMessage（伝達された発話／言葉）と大まかに括ったフレーム要素について、考察を加える必要があることを簡略に述べたい。「言う」「話す」などの基本伝達動詞の用法に関しては、柴田編（1979(2003)）に、示唆に富む指摘がある。(4)に挙げたような用法上の制約である。

(4) 「言う」 vs. 「話す」

a. 独り言	を	言う	*話す
b. 早口言葉	を	言う	*話す
c. 思い出	を	話す	*言う
d. ぎゃあ	と	言う	*話す

Messageを表わすのに、まず「を」格の名詞句をとる形式と「と」引用助詞をとる形式があることは上述したが、さらに、同様に「を」格の名詞句をとるMessageでも動詞によって用法制限があること（例：a/b 対 c）、同様に「と」引用助詞をとるMessageでも動詞によって用法制限があること（例：d）が分かる。コーパス分析において、このような使用制限の事例を蓄積してきている。

(5) フレーム要素：MESSAGE の細分化（作業仮説）

Message-Report	例
Message-Report-Form	〔「戦後五十年を契機に実現させたい」と〕話している。
Message-Report-Content	〔知恵を出すように〕言われても
Message-Description	
Message-Description-Form	〔独り言 を〕言う；〔お祝の言葉を〕述べる
Message-Description-Content	〔地震体験 を〕話す；〔過去を〕語る

このような現象を尊重した日本語の記述を行なうために、第一に、フレーム要素の再考をし、フレーム要素の細分化を作業仮説として立てて分析を進めている。(5)に示すように、Messageフレーム要素を、まず報告か描写かの観点でMessage-ReportとMessage-Descriptionとに分け、さらにそれぞれが形式提示か内容提示かで細分化して分析している。

第二に、コーパス分析に基づき、動詞ごとに結合語彙の洗い出しを行なっている。Messageフレーム要素となる「を」格の名詞句に関して、新潮文庫戦後54冊データを用いて、動詞ごとに具体的な結合語彙を洗い出してみると、「言う」(818トークン, 116タイプ)に関しては、「こと」を基幹名詞とする様々な名詞句の他には、「文句」(53例)「礼」(48例)「悪口」(23例)などのような心的態度表出行為の感情を表わす名詞群や、「冗談」(17例)「嘘」(12例)「世辞」(9例)「皮肉」(8例)などのような言語行動の様式を表わす名詞群の頻度が高い。「話す」(198トークン, 64タイプ)の場合は、「事情」(16例)「訳」(6例)「いきさつ」(4例)「経緯」(4例)「計画」「状況」など 伝達された発話の内容を一括描写する名詞群が主に使われている。「述べる」では、「意見」「礼」「感想」「理由」等が、「語る」では「過去」「夢」「哲学」等が、「伝える」では「旨」「気持ち」「命令」「意向」「意志」等が挙がる。もちろんこれらの名詞の中には複数の動詞と結合しうるものも多く、決して一対一対応の単純リストを結果として求めるわけではない。が、結合名詞群の分類を行ない、結合しうる語彙リストを、フレーム要素の分類語彙表として構築することは、語彙情報記述への重要な貢献となる³。

さらに、類型論的特色を考慮した分析を課題としている。例えば、上述の「を」格名詞句 + 伝達動詞に加え、擬態語・擬声語 + 伝達動詞の分析を進めている。「いう」について、(高頻度から)「ぶつぶつ」「ふうふう」「ひいひい」「ブーブー」「ずけずけ」「もごもご」等の擬態語が「ぶつぶついう」「ふうふういう」という表現で「いう」と結合する。この用法での擬態語は、単に様態(manner)フレーム要素(3b 参照)として捉えるのでは不十分である。「ぶつぶついう」は「文句をいう」或いは英語で complain 等の語彙で表現される伝達行為を意味しており、様態表現によって伝達行為を表出する COMMUNICATION_MANNER フレームに属する表現である。日英語で対照すると、その語彙化・言語表現化パターンは伝達領域でも一貫した類型論的特色を反映してことが明確になった。

注

¹ (1)(2)は JCLC 2004 ワークショップ時の FN の HP <http://www.icsiberkeley.edu/~fiamenet/> に基づく。

² 第三期のパークレーFN プロジェクトでは、英語の FN 構築に加え、他の言語で進められている FN (スペイン語、ドイツ語、日本語など)への包括的な示唆や指針を考察する試みも進行している。

³ 『日本語動詞の結合価』は動詞の取りうる補語構造を意味分類名で置き換えるのではなく、コーパスに出現した実際の名詞句そのものを列挙している。現在は、それらの名詞句の意味グループ化を試みているとのことである(荻野他 2003)。上記 JFN のフレーム要素の語彙分類表構築の試みとの違いは、JFN では LU がとりうる各々のフレーム要素ごとに実際に使われた名詞句をリストアップするいわばトップダウンのアプローチであるのに対して、荻野らの試みは個々の名詞句の事例を参照しながらそれらの共通項から意味グループを作り出して体系化していこうとするボトムアップのアプローチと言えよう。

参考文献

- 柴田武、國廣哲彌、長島善郎、山田進、浅野百合子. 1979(2003). 『ことばの意味 2: 辞書に書いてないこと』平凡社
- 荻野孝野, 小林正博, 伊佐原均. (2003). 日本語動詞の結合価. 三省堂